

聖書：創世記 6：9～22

説教題：箱舟を造りなさい

日時：2023年4月16日（朝拝）

「これはノアの歴史である」と今日の箇所は始まります。この「これは～の歴史である」という表現は、創世記に繰り返し出て来るもので、話が新しい内容に移る時のマークのようなものになっています。これから見るのはノアに関することです。直前まではどんなことが語られていたでしょうか。6章5節を見ると「主は、地上に人の悪が増大し、その心に凶ることがみな、いつも悪に傾くのをご覧になった」とありました。それで主は地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められました。そしてご自身の心の中で、こう決断されたことが7節に記されました。「わたしが創造した人を地の面から消し去ろう。人をはじめ、家畜や這うもの、空の鳥に至るまで。わたしは、これらを造ったことを悔やむ。」しかしそんな世界にそうでない人がいました。それはノアでした。8節に「しかし、ノアは主の心にながっていた」とあります（直訳は「主の目に恵みを見出した」、欄外注参照）。この彼がいたことによって、世界は洪水のさばきを受けますが、なお保たれて行くこととなります。そして後で触れますように、神の救いの約束がなお進展して行くこととなります。

さて最初の9～12節にはノアとノアを取り巻くこの世界の状態とが対比して述べられています。まず9節にノアについて「ノアは正しい人で、彼の世代の中であって全き人であった」とあります。ある人はここを読んで、もしかすると戸惑うかもしれません。そして次のような疑問を持つかもしれません。果たしてこの世界の中に正しい人などいるのだろうか。さらには全き人などと呼ばれる人が存在し得るのだろうか。すべての人は罪人だと聖書は言っているのではないだろうか。もちろんすべての人は神の御前で罪人であるというのはその通りです。創世記はノアは罪のない人だったと言っているわけではありません。実際ノアは洪水後の9章で罪を犯します。ではこれはどういう意味なのでしょう。その後「ノアは神とともに歩んだ」とあります。ノアは神を信じ、神との交わりの中で、神に従って歩む人でした。参考になるのは、たとえばエゼキエル書18章5～9節で正しい人についてこう言われていることです。「人が正しい者であるなら、公正と義を行う。丘の上で食事をせず、イスラエルの家の偶像を仰ぎ見ず、隣人の妻を汚さず、月のさわりのある女に近寄らず、だれも虐げず、質物を返し、物をかすめ取らず、飢えている者に自分の食物を与え、裸の者に衣

服を着せ、利息をつけて貸さず、高利を取らず、不正から手を引き、人と人との間を正しくさばき、わたしの掟に従って歩み、わたしの定めを守って真実を行う。このような人が正しい人であり、この人は必ず生きる——神である主のことば。」 　　こういう人について聖書は「正しい人」という表現を使っています。これは創世記 6 章 11～12 節に述べられる他の人々と比べると良く分かって来ます。地は神の前に墮落し、地は暴虐で満ちていました。そのような世代の中であって、ノアは神とともに歩み、神の戒めに従って歩む人でした。みんな神をそっちのけにして、自分の欲望に従って歩む中、ノアは神とともに歩む正しい人でした。そういう人がこの世界に残されていたのです。

そしてこの「神とともに歩んだ」という表現は、明らかに前の 5 章に出て来たエノクとノアを連結するものです。5 章 22 節に「エノクはメトシェラを生んでから三百年、神とともに歩み」とあり、24 節にも「エノクは神とともに歩んだ」とありました。そのようなエノクは死を見ることなく天のいのちへと上げられました。すなわちそのような人は永遠のいのちに生かされるというメッセージを語るものでした。そしてこのエノクの記述は 5 章全体のセツの系図の中に位置しています。これはさらに遡って創世記 3 章 15 節の光のもとで理解されるべきものです。創世記 3 章 15 節ではいわゆる原始福音が語られました。アダムとエバが罪を犯した直後、神はご自身が定めたメシヤによる救いを約束してくださいました。女から出る一人の子孫が蛇とその子孫に打ち勝つというものです。最初の夫婦からカインとアベルが生まれましたが、カインはアベルを殺して主の前から去りました。果たして女から出る一人の子孫という約束はどうなるのか。そんな中、アベルに代わって三男セツが与えられました。つまりセツが救いの約束を受け継ぐ者となりました。その流れの中にエノクがいたということが 5 章で語られていたわけです。そしてこの 6 章で、そのエノクと連結される形で、ノアがこの約束を受け継ぐ者となったということが言われているわけです。周りがみな神から離れ、悪に傾き、世界の将来が絶望視される中、ノアにおいて創世記 3 章 15 節の神の約束は生き続けるのです。救いのラインがつながって行くのです。10 節にはノアに三人の息子がいたことが述べられ、この子どもたちがさらにそれを受け継いで行くこととなります。

さてこのようなノアと対照的に、地は神の前に墮落し、暴虐で満ちていました。ここには非常なアイロニーがあります。本来、世界に満ちるべきものは何だったでしょ

うか。創造当初、神は創世記 1 章 28 節で「生めよ。増えよ。地に満ちよ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地の上を這うすべての生き物を支配せよ。」と人間に言われました。その少し前の 1 章 22 節では動物に関して「生めよ。増えよ。海の水に満ちよ。云々」と言われていました。神に造られた良い被造物が世界に満ちて、神の栄光を現す世界を形造って行くことが神の御心でした。ところがこの時、地に満ちていたのは暴虐でした。御心に全く反する状況です。また 12 節に「神が地をご覧になると」とありますが、この表現も天地創造の記事のある場面を思い起こさせる言葉です。それはどこでしょうか。それは創世記 1 章 31 節の「神はご自分が造ったすべてのものをご覧になった」という表現です。「見よ、それは非常に良かった」とそこでは記されていました。ところが今日の 6 章 12 節ではどうでしょう。ここでは神がご覧になると、「見よ、それは墮落していた」と記されています。ここに明らかな対比があります。創世記 1 章では、神が地をご覧になると「見よ、それは非常に良かった」。創世記 6 章では、神が地をご覧になると「見よ、それは墮落していた」。それを見た時のショックがこのように表現されています。そこで神は 13 節にあるように、すべての肉なるものを地とともに滅ぼし去る！というさばきを行わざるを得なくなったのです。

さて神はノアにやがて来るさばきについて語った後、14 節以降で箱舟建築を命じます。ここで神は細かい指示を与えています。ゴフェルの木を用いるべきこと、箱舟に部屋を作るべきこと、内と外にタールを塗ること、また長さ、幅、高さの指定もあります。一キュビトが欄外にあるように約 44 センチとすれば、箱舟の長さは 135 メートル、幅は 22.5 メートル、高さは 13.5 メートルにもなります。当然このような舟など造ったことのないノアに神は細かく指示を与えています。さらに天窗を作ること、戸口を設けること、三階建てにすべきことが語られます。そうして 17 節で初めて、行われるのは大洪水によるさばきであると告げられます。それによって地上のすべてのものは死に絶えると言われています。

18 節で神はノアと契約を結ぶと言われます。「契約」という言葉が聖書に出て来るのはここが最初です。神は人間と契約を結んでご自身を拘束する必要などないお方なのに、私たちが契約を通して神に信頼して歩むため、神はご自身を低くしてこのような契約を結んでくださいました。このように人間と契約を結んで導いてくださる神のお姿は聖書全巻にわたって示されているものです。この契約において神が果たすと約束していることは、ノアとその家族を大洪水のさばきから救うことです。一方、ノア

のすべきことは神の指示に従って箱舟を作ること、またその箱舟に入ることです。またこの契約では動物たちのことも覚えられていることが 19 節以降から分かります。神の関心は単なる人間の救いだけではありません。神が造られた全被造物、全世界の回復もその視野に入れられています。ですから 19 節で「また、すべての生き物、すべての肉なるものの中から、それぞれ二匹ずつを箱舟に連れて入り、あなたとともに生き残るようにしなさい」と言われます。神は被造物も保とうとしておられます。そのために雄と雌を連れて入るようにと言います。そして 20 節では「鳥は種類ごとに、動物も種類ごとに、また地面を這うすべてのものも種類ごとに、云々」と言われます。ここの「種類ごとに」という表現も創世記 1 章の記述を思い起こさせます。創世記 1 章 11 節、12 節、21 節、24 節、25 節に繰り返しその表現が出て来ます。またここにある、鳥、動物、地面を這うものという順番も創世記 1 章に出て来る順番と同じです。つまり神はご自身が創造したこの世界を投げ捨てようとしておられるのではなく、洪水によってこれをきよめて、この世界を良いものとして取り戻し、新しい始まりを与えようとしておられたことが分かるのです。そして箱舟での長期間にわたるであろう生活のために、食べられるものを集めるように！という指示も最後の 21 節に記されています。

さてこのような神の命令に対してノアはどのように応答したでしょうか。6 章最後の節は非常に印象的です。22 節：「ノアは、すべて神が命じられたとおりにし、そのように行った。」 ノアの行動について書いてあるのはたったこれだけです。そしてこの短さはノアが完全に、忠実に神の命令を守り行ったことをかえって強調するものとなっています。私たちがノアの立場だったらどうでしょうか。神が言われたことは大変なことです。巨大な箱舟を造ることは疲れることです。お金もいくら必要になるかわかりません。とんでもない労力をささげなければなりません。またそれを造ったところで本当に雨が降るのでしょうか。大洪水など起こるのでしょうか。何年も何十年もかけて箱舟を造っても、その大洪水が起きなければ自分は空しい一生を過ごしたことになります。神の言葉を心から信じ続けなければこの作業に当たることは不可能です。それに人々から奇妙に思われ、バカにされるでしょう。なぜこんな陸地に巨大な箱舟を造っているのか。ついにノアも頭がおかしくなったか。それに大洪水によって多くの者を滅ぼす神とは一体どんな神か！と皆が嘲ったことでしょうか。ところが「ノアはすべて神が命じられたとおりにした」とここに一言で語られています。そのことを強調するために、最後にもう一度、「そのように行った」と言われています。このノ

アの姿を見る時、最初の9節で彼が「正しい人」であったと言われたことの意味が分かって来るのではないのでしょうか。「彼の世代の中にあって全き人であった」と書かれたことに異論を唱えることなく頷けるのではないのでしょうか。確かにノアは神とともに歩んだ人でした。またそうでなければ、この箱舟建築は到底できなかったでしょう。これは神とともに歩んだ人であってこそ初めてなし得た奇跡的なわざであったと言えます。

今日の箇所とセットで読みたい新約聖書の言葉を最後に参照したいと思います。ヘブル人への手紙11章7節：「信仰によって、ノアはまだ見ていない事柄について神から警告を受けたときに、恐れかしこんで家族の救いのために箱舟を造り、その信仰によって世を罪ありとし、信仰による義を受け継ぐ者となりました。」ここにノアは信仰によって箱舟建築に当たったことが述べられています。彼は人間の力によってこれを行ったではありません。神への信仰によって、すなわち神との交わりを通してこのことを行ったのです。このノアの箱舟建築は、人は神とともに歩む時、その信仰を通してどんなことができるのかを証しするものとなっています。

と同時に思われることは信仰はこのような行いに結実するという事です、このノアの姿は信仰と行いの関係について大事なことを私たちに教えてくれます。救いは行いによらず、ただ信仰によります。聖書でそのように教えられており、それはその通りです。しかしそれは私たちに行いがいつまでもいないという意味ではありません。ただ信じてさえいれば、行いがなくても良いという意味ではありません。ノアの姿が示していることは、信仰はこのような行いに自らを表すということです。彼の信仰は神が命じた通りに箱舟を造るという彼の行いに現れました。そしてそのように行った彼が、自らの造った箱舟が用いられる形でこの後、救われて行くのです。

今日の御言葉の光の下で私たちはどうでしょうか。ノアの洪水物語は最後の日の最終的なさばきがあることを指し示すものです。イエス様がそのように言うておられます。果たして私たちは自分が生きているこの世代にあって正しい人でしょうか。神とともに歩み、神の戒めに従って歩もうとする人でしょうか。「地は神の前に墮落し、地は暴虐で満ちていた」というのは最後のさばきが行われる前のいつの日にも見られる状態でしょう。その中にある私たちはこの世に染まり、この世と一緒にいるのではなく、ノアのように「神とともに歩む」者であることを祈り求めたいと思います。神と

ともに歩む中で、神が力を与え、励ましてください。その神とともに歩む歩みは行いに現れる歩みでもあります。ノアの姿から学んで、私たちも彼が指し示す同じ信仰の道を行く者とされたいと思います。上からの力によって神の御言葉に従い、そうして神がくださる救いにあずかって行く信仰の民、救いの民の歩みを導かれたいと思います。